椅子を並べてつくられた文字（中央区・熊本国府高等学校）（熊本県防災消防航空隊提供）

第６章　職員手記～それぞれの熊本地震～

ヘリベースの活動について

熊本県防災消防航空隊　隊長
消防司令　藤山修一

「ヘリベースはどこに？」、「エプロンは何機駐機できる？」と総務省消防庁から連絡があったのが熊本地震における緊急消防援助隊受援活動のはじまりでした。

益城町の熊本空港に隣接する熊本県防災消防航空隊基地は、地震による被害を受け停電、断水した状態ではあったのですが、ヘリコプター駐機場であるエプロン又は建物についての被害は軽微であったため、消防・防災ヘリコプターの進出拠点と集結場所であるヘリベースに決定しました。

グラスエリアも含めてエプロンは最大 20 機駐機可能と即答したものの、「エプロンの広さは十分だが 20 機受け入れて、機能的、人的に大丈夫なのか」、「過去に１ヘリベースで 20 機受け入れたことは聞いたことがない」「後方支援の準備は十分か」と不安な状況ではありましたが、受援体制を整えることが最優先とし、あらゆる準備を行いました。

熊本県に飛来してくる航空機は、17 都道府県の 18 機に確定した後、機体の装備、ヘリベースの気象、座標、進入方法、航空機燃料の有無等を確認し、その中で特に念密に調整を図ったのがヘリコプターの到着時間でした。

当然、総務省消防庁や出場航空隊から集中して連絡があり、対応に追われたのを鮮明に覚えています。

時間の経過とともに消防・防災ヘリコプターが到着、ヘリベースは騒然となり、混乱した状況でしたが、着々と受援体制を確立することができました。

ヘリベースに到着した航空隊に最新の情報を伝達するとともに、ヘリテレ又はヘリサットを使用した画像伝送による情報収集、道路が遮断され孤立した住民の救助、熊本県外の病院へ患者搬送等に対応しました。

熊本地震に対応した緊急消防援助隊の航空隊の緊急出動は、4月16日が最大で40件、4月27日まで合計で77件、出動延隊数132隊、活動延人員805人が対応し、ヘリベースとなった熊本県防災消防航空隊基地の熊本県防災消防航空隊が応援航空隊の任務付与及び後方支援を行ったところです。

地震発生時、日本一の緊急運航を計上する熊本県消防防災消防航空隊の機体「ひばり」は、毎年実施する耐空検査により運航休止中であったため、飛行する選択肢はありませんでした。

受援活動に専念できたこととは言え、悔しい思いであったことには違いありません。

余震は継続し、厳しい環境で少ない情報、幾度となる情報の錯綜の中、活動が無事終了したことに感謝いたします。

また、皆様からの甚大なるご支援、ご協力ありがとうございました。

「ｎｅｖｅｒ　ｆｏｒｇｅｔ　4．14」

熊本県消防学校　教務参事
初任科 61 期担当　消防司令補　木村栄徳

平成 28 年４月 14 日、初任科を担当していた私は、翌日の校外研修（消防職員意見発表会の聴講）の準備を終え、21 時頃に退勤しました。

帰宅直後に突然の大きな揺れを感じ、テレビのニュースで震度７の地震と知りました。急いで消防学校に戻った私は、まず 90 人の初任科生の安否を確認しましたが、幸い負傷者もなく、建物の被害もそれほど大きいものではありませんでした。ただ、大きな余震が続いていたため、学生を屋外へと避難させ、それぞれの自家用車で休むようにと指示を出しました。

大規模災害が発生した場合、消防学校は緊急消防援助隊の進出拠点に定められているため、私は益城インターチェンジへ向かい、続々と集結してくる緊急消防援助隊の誘導を行いました。

朝方、消防学校に戻るとグラウンドは緊援隊の車両で埋め尽くされ、校舎内にも指揮所が設けられており、当然ながら、初任科の授業を行えるような状況ではなくなっていたのです。

緊急措置として、学生たちはこの日から所属の消防本部へ帰すことになったのですが、私はこの時点では、週末には緊急消防援助隊の活動も終息し、月曜日から通常どおり授業を再開できるだろうと考えていました。

しかし、翌 16 日に起こった本震により、消防学校は建物に大きな被害を受け、初任科はそのまま１ヶ月の休校を余儀なくされました。

前震の後からは、教官が消防学校に 24 時間体制で詰めることになり、緊急消防援助隊の支援や県の備蓄倉庫に届く支援物資の搬入などを行いました。その間、校舎の安全性が確認できなかったため、夜は駐車場にテントを張り、寝袋で仮眠をしました。

発災当初は初任科の再開すらも危ぶまれ、私自身も意気込んで臨んだ初任科担当でしたがその出鼻をくじかれ、本当に行き詰った状態でした。

その後、本校舎と学生寮は使用できる状態だということが確認されたため、それから私は気持ちを入れ替え、緊急消防援助隊を支援する一方で初任科を再開すべく、建物内の復旧やカリキュラムの再編に取りかかりました。１ヶ月分短縮したカリキュラムの再編には毎日頭を悩ませましたが、周りの方々の助言もあり、最終的には実科訓練を優先させ、省いた授業は課外の時間等でフォローすることで、どうにか５月 16 日から初任科を再開することができたのです。

学校再開後の初任科生 90 人は、「ｎｅｖｅｒ　ｆｏｒｇｅｔ　４.14」をスローガンに、過密スケジュールで連日続いた屋外での実科訓練をこなし、再開から４ヵ月後の９月 16 日、異例の車庫での卒業式を無事に迎えることができました。

車庫で行われた卒業式の様子

例年実施していた俵山での踏破、走破訓練や大切畑ダムでの最終総合訓練など、初任科の思い出に残る大きなイベントを削除せざるを得なかったことに心残りはありますが、地震で休校した１ヶ月の間に、各消防本部で様々なことを経験し、まだ力になれない悔しさも感じながら、自身の選んだ仕事の重みに気付けたという面では、とてもプラスになったのではないかと思います。

私自身も、この年の初任科を担当したことで貴重な経験をさせていただき、成長させてもらったと思っています。

また、緊急消防援助隊の後方支援の面においても貴重な経験ができ、その問題点にも触れることができました。

今回の熊本地震での経験を、今後の業務に活かすとともに、卒業した 90 人を今後も見守って行きたいと思います。

災害情報収集を回顧して

予防部指導課　副課長
消防司令長　高野秀明

平成28年４月14日の夜、私は、熊本市中心部の繁華街で食事会の最中であった。

ワインバーの二次会で、飲酒により、ほろ酔い状態の時、突然、大地震は襲ってきた。

私は、何が起こっているのか分からず、ただ、イスにしがみ付くのが精一杯であった。激しい揺れの中、店の中を見回すと、天井付近にお洒落に吊るしてあったワイングラスが、雨のように降り注ぎ、床に落ちて激しく割れ、テーブルの上の料理やグラスも宙に舞っていた。

店内にいたお客さんは、急襲した激しい揺れに一瞬絶句し、店内の物という物が飛び交い割れる状況を見て、多くの人々の悲鳴が響き渡り、大混乱となった。

揺れが収まり、我に返り、これは大地震だとやっと気付いた。

私は、直ぐに混乱している店員さんに強引に精算をお願いし、消防局へ向かった。途中、繁華街の道は、建物から飛び出してきた人々に埋め尽くされ、人を掻き分けて進む状況で、タクシーを止めようとするも空車表示にかかわらず、乗ることはできず、徒歩にて消防局までたどり着いた。

非常災害時、私の課の任務は災害情報収集整理であったことから、消防局対策部のある情報司令課へ向かった。

私が、消防局対策部へ到着した時、まだ十分な人員は揃っておらず、災害情報収集にあたっていたのは、４、５人程度であった。

情報収集は、６消防署との専用電話と無線を併用して行うものであるが、初動段階では、１人で２署、３署分の電話や無線対応をせざるを得ず、重複した情報や必要な情報整理が十分とは言い難い状況であった。

具体的には、消防署から電話にて収集した情報と無線を傍受した情報が同一なのか異なる事案なのか判断がつかない状況で、確認するいとまもなく、次の電話が鳴るというものである。

特に、益城町や熊本市東区については、多くの災害が同じ地区で集中して発生しており、災害状況の把握は困難を極めた。

益城西原消防署においては、電話連絡するも災害現場に多くの人員を投入せざるを得ず、情報収集・連絡要員の確保も困難を極めていた。

益城西原署員と電話連絡をした際の会話として、「とにかく、益城町は全体が被災しており、災害発生場所が地域全体である。現場に到着した隊員は、１箇所ではなく、救出や安否確認を終えると、すぐ隣の建物の住人から助けを求められることの連続で、状況などを正確に把握できない。隊員自体も体力的に非常に厳しい状況となっている。」また、「情報収集連絡についても、人員が圧倒的に不足している。本部から連絡要員を派遣してほしい。」などの悲痛な言葉が並んだ。

また、情報収集を進める中で、「●●の現場には、１人が徒歩で向かい情報確認を行っ

ている。」や「小隊が到着するや否や多くの被災者から複数の救出要請を現場で受け混乱している。」など同時多発する地震災害の恐ろしさを、情報収集を通じて思い知らされた。

我々、情報収集担当もこれらの案件を消防局対策部へ報告し、熊本市の消防力を益城町や東区へ集中的に投入し、対応を図ったものの、災害最前線の声を的確かつ迅速に上層部へ報告できたかについては、疑問が残るところである。

今後については、予防部内において検証した熊本地震規模の災害に対応するための情報収集体制について、限られた人員の配置方法や情報の優先順位を更に明確にするとともに、初動体制と中期及び終息期を区分した対策を検討していく必要性を痛感した。

最後に、今回の大震災に対する全国からの多くの救出・救助、多方面にわたる生活救済への支援に対し、心から感謝します。

我々は、必ず震災前の熊本を取り戻し、更に住み良いまちを創造していくことをこの場を借りて、支援していただいた全ての皆様へ約束します。ありがとうございました。

未曾有の災害を経験し思うこと

中央消防署　警防課長
消防司令長　中村雅司

その日も私にとっては、いつもの夜のはずだった。

帰宅して、入浴後に夕食をとり、しばらくして自室に入り、就寝まで自分の時間を過ごす・・・。

しかし、その日だけは違っていた。

ベッドに横になり、くつろぎながら好きなテレビ番組を見ていた時、突然襲われた大きな揺れ、職業柄、防災講話などをすることもあり、地震発生時の対処法を当然教えていたりしたが、いざ自分に振りかかると、なかなか思うようにできないと言うことに気付かされた。

揺れが収まると、まず、家族の安否を確認するため階下に下りた。

私は、現在、年老いた義父母と同居しており、真っ先に声を掛けると「大丈夫」との返事があった。その後、署へ参集するため準備をしているところへ当務責任者の課長代理からの連絡があり「職員、庁舎、車両は大丈夫です。」とのことだったので一安心し、これから参集する旨を伝えた後、家を妻に託して自転車で参集を開始した。

なお、参集方法はかねてより「自転車」と決めていた。なぜなら、多少道路にハザードがあっても「担いで」乗り越える自信があったからだ。また、燃料の心配をする必要もないというのも理由の１つであった。

消防職員は、情報収集を行いながら参集するというのが「参集者の役目」でもあるため、確認しながら署へ向かったが、少なくとも停電や建物倒壊、ましてや火災の発生はなかった。

署に到着してまず驚いたのは、庁舎に住民が多数避難してきており、これまでの常識では考えられないことであった。そもそも消防署へ避難者が来ることを想定していなかったため、「受け入れざるを得ませんでした。」と報告を受け、その時は戸惑いもあったが、受入れの判断はやむを得なかったと思っている。その後しばらく避難者との「共存」が続くこととなった。

署内の状況はと言うと、すでに数隊が災害出場しており、署に残留している職員はわずかで、残留している職員と参集職員が手分けをして署「実動計画」に基づく活動を実施していた。

私は、残留職員のうち上席者に現状報告を受け、今後の災害活動方針について署長、副署長との検討に入った。

なお、私は、過去の災害対応経験から大規模災害発生時には、次のことを実施しようとすでに考えていた。

１つは、自主参集対応災害とはいえ、未参集職員に対する電話連絡、２つ目は、原則、所属参集と決められている非番・週休参集者のうち、出張所・庁舎の非番職員を本署へ参集させるというものであった。

その理由の１つは、職員本人の安否の確認と本人を含む家族の被災による参集不可能職員数の把握である。

大規模災害においては、不幸にして職員が被災することもあるし、本人が被災せずとも家族が被災することにより参集できないこともある。署の警防責任者としては、災害対応力の確保は必要不可欠だと考えていたからである。２つ目の理由は、出張所や庁舎に非番員を参集させても使用可能な車両は限られており、多くの職員が待機か、徒歩で対応可能な範囲の活動となることが予測できたからだった。それよりも、本署で一元管理し、署管内全域の状況により効率良く活動させる方が対応数も増加し、市民の負託に応えられるとともに職員数が多ければ、それだけ休息も可能となり、長期の災害対応にも備えられるからであった。

そのため、出張所・庁舎には、参集者のうち責任者の出張所長・庁舎管理者と当務の週休者だけを残し、非番員に軽消防車両で本署に来るよう指示をした。あわせて、局各課所有の使用可能な車両、特に多数搬送を考慮して、多目的車（マイクロバス）も使用できるよう準備を行った。この考えは、過去の災害対応経験や市危機管理防災総室へ出向した経験があったからこそである。

しかし、災害対応の最盛期には、それでも車両が不足し、徒歩で災害現場や避難所へ向かわせることもあった。

また、通信手段の確保も困難を極め、配備の無線機ではとても足らず、やむを得ず個人の携帯電話（スマートフォン含む）を活用せざるを得なかったため、全職員へ携帯電話のフル充電を指示し、常に携行するよう伝えた。

そして対応が一段落したのは、翌 15 日の夕刻頃だったと思うが、対応職員の縮小について署長、副署長と検討し、当務員での対応と管理職２人の当直体制をとることとなり、副署長と私は署を後にし、帰宅したのは 20 時頃だったと記憶している。

帰宅後、食事をしたのかどうかも覚えていないが、疲労で直ぐに眠りに就いたことは間違いない。

すると「ドーン！」と、突き上げるような揺れと振幅の大きな揺れに起こされた。明らかに前回とは違う。また、今回は就寝中で、しかも真っ暗闇の中を襲った強い揺れにより、恥ずかしながら危機回避行動をとることもままならず、ベッド上で揺れが収まるのをじっと待つしかなく、消防職員として自分の不甲斐なさと軽い自己嫌悪にかられたのも事実だった。

しかし、すぐさま前回同様、義父母の状況を確認すると妻にその後を託し、参集を開始した。

今回も幸いなことに、自宅も大きな被害はなく、家族の無事とともに、そのことが業務に専念できた大きな理由であったことは間違いない。

なお、「本震」時は「前震」時の経験をもとに同様の対応を行いながら活動し、全ての収束を迎えるまで、全署員による地道な努力が続けられた。

その中には、「避難所の運営補助」など、これまで消防職員の業務とは直接結びつかないと思われていたものもあり、部下職員には大変な苦労をかけたと思っている。

ただ、この震災を受けてもゆるぎなく変わらなかったもの、それはやはり「経験（体験）に勝るものはない」ということだった。では、経験のない若い世代の人たちに、どのように伝えていけば良いのか、答えが見つからないのも事実である。映像や画像など、ビジュアルに訴えるものや想定訓練など、災害が起きるたびに、これまでも様々な方法を駆使して

教訓が伝えられてきたが、やはり「我身」に降りかからないものへの関心は薄い。その「ジレンマ」の中で、これからも様々な知恵を絞り、一歩でも半歩でも防災の歩みを進めることが、我々消防職員に与えられた永遠の「使命」であるし、震災で亡くなられた方々への弔いともなるであろう。

最後に、改めてこの未曾有の災害に立ち向かってこられた多くの被災者の方々の魂の強さに感銘を受けるとともに、１日も早い復興がなされることを願ってやまない。

途絶えてはいけない　記憶

中央消防署　警防課　課長代理
消防司令　甲斐 憲二

「何やこの揺れは、早く収まってくれ･･･」自分の心の中で何度も叫んでいる自分がいた。平成 28 年４月 16 日１時 25 分、後に本震と言われる震度６強の揺れを消防署で経験することになるとは誰が予測できたであろうか。とっさに家族の安否を考えるも、「どうか皆無事でいてくれ・・・」と祈るばかりでどうすることもできないもどかしさと、「この揺れはでかく長い、絶対被害が出るかもしれない」と冷静になって状況を分析しようとしている消防人としての想いが錯綜していた。当番員全員の安全を確認すると同時に、車両の出場状況異常なしの報告を受けるも、ＲＣ造の庁舎壁面の至るところに亀裂が見られ、「これは現実なんだ」と頭の中でスイッチの入る音がした。

数十分後に救助（建物閉じ込め）指令が流れ、状況がなかなかつかめないまま救助現場に近付くにつれ、停電している家屋、毛布に包まっている老若男女、次第に暗闇の中に浮き彫りになって全室明かりの消えた異様なまでに暗いマンションが見えてくる。何かおかしい、１階部分が東側に向かうにつれ、座屈して建物全体が東へ傾いている。このような光景は「阪神大震災」の中継ニュースで見たことがあるが、今まさに現実に目の前で起こっているのだ。

愕然とした。ハザード（危険要因）だらけだ。

１階座屈による数台の圧損駐車車両、変形・破損した玄関や開口部、ひび割れや亀裂が生じた各階通路部分及び構造躯体、さらに追い討ちをかけるようにガス漏洩による異様なまでのガス臭と警報音。危険過ぎる、二次災害の恐れが計り知れない、しかし、マンション内にとり残されている人々を一体誰が助けるのか・・・。我々消防士が救助に行かなければ、他に誰もいないのである。心の中で覚悟を決めた、「絶対に助ける、しかし、進入隊員には絶対に怪我はさせない。」それは自分にも言い聞かせることであり、責任の所在を確認することでもあった。大隊長として出場隊全員を集め、要救助者情報・建物状況・活動危険情報等を共有し、活動方針（要救助者救出・二次災害防止）を下命したところで、苦渋の決断を迫られることになる。「進入隊、前進指揮中隊長と先着ポンプ小隊」そう告げると、両中・小隊長は間髪入れずに「よし、了解」と応えてくれたのである。座屈建物を目の前にして、また、命の危機もある中で、これぞ消防士だ。そして、何という熱い、気迫のこもった男たちだろう。映画「タワーリングインフェルノ」のワンシーンを思い起こさせるような情景であった。

進入開始後は地上部隊を最大限にバックアップさせ、要救助者の救出と進入隊の安全確保を最優先に活動方針を切り替え、「絶対に要救助者と進入隊を地上に降ろす。」の信念の下、活動指揮にあたった。

当局管内で多数事案が発生している中で、

また、応援隊が見込めない中、しばらくして緊急消防援助隊福岡県大隊が応援に駆け付けてきてくれたことは、本当にありがたく「感謝」の二文字では言い表せない状況であった。

十数人の要救助者全員と進入隊全員が怪我等もなく地上に降り立ったことに、安堵感と達成感に満たされ、29 年前「消防」という仕事を選んだことに間違いはなかったと改めて思い起こさせる活動であった。

職員手記を執筆するにあたり、熊本地震から１年と半年が経過し、今では地震時にとった行動が一部分ではありますが記憶に残っていない箇所があり、懸命だったのか疲労困憊だったのか分かりません。

「途絶えてはいけない記憶」として思料していた矢先に、職員手記を執筆し、文章にて後世に伝えられることに感謝の意を表したいと思います。

今後また絶対起こらないとは言い難い災害事案の中で、「平成 28 年熊本地震」を超えるような災害がなく、かつ、最後の地震災害事案であることを望みます。

生きて帰ることの大切さ

中央消防署　警防課　特別高度救助小隊
小隊長　消防司令補　梅本智文

平成 28 年４月 14 日、非番だった私は、夕食を終え、いつものとおり家族との時間を過ごしていた。突然、これまでに体験したことのない強く長い地震に襲われ、家具や電化製品が転倒し、部屋のクロスには亀裂が入った。立っていることもできないほどの揺れで、その場で揺れが収まるのを待った。その間、「急いで職場に行かなければ」「みんなは大丈夫だろうか」「まさか熊本で地震」など様々なことが頭をよぎった。

揺れが収まると、家族は動揺していたが、「揺れが収まったから大丈夫だ」と言い聞かせ、急いで勤務地の中央消防署へ向かった。消防職員なら当たり前、仕方ないことかもしれない。当時小学校１年生の息子の目にそのときの自分はどう映っていたのだろうか。家族を捨て消防の仕事に行く誇らしい父？自分のそばにいてくれない頼りない父？今でも息子がどう思ったのか気になるところである。

職場に着くと、自分が担当する車両はもちろん出場中であり、事務所では皆が殺気立っていた。自主参集の職員が次々に集まり、順番で臨時の隊が作られた。震源地の益城町へは当務の車両が災害対応で向かっていたため、私たちは管内の被害調査の下命を受け、調査に向かった。助けを求めている人がいないかをマイク広報で呼びかけながら、同時に道路状況を調査する中で、多くの住民が屋外でお互いの無事を確認していた光景が目に焼き付いている。

４月 16 日、０時 19 分、署で待機中、益城町の倒壊の恐れのある病院から入院患者を転院させる内容の特命の救助指令が要請された。現場には救助工作車で自分を含め５人で出場した。出場途上、道路の隆起が複数あり、信号機は停電状態、全員で安全を確認しながら現場へ向かった。

当病院は耐火造（一部鉄骨造）５階建て、入院患者が 30 人の総合病院で、地盤には隆起、壁面にはクラック（亀裂）が認められ、付近は停電状態であった。先に現場に到着して活動していた消防隊、ＤＭＡＴから状況を確認し、指揮隊から活動方針を下命された。

私たち救助隊は、地震警報機を設置し、４チームを作成、１つのチームを病院内のクラック（亀裂）の監視活動、残りの３チームで患者の搬送活動を行った。

ＤＭＡＴとの連携、病院内の暗さ、入院患者の位置確認等で、１人搬送するのに要した時間は約 20 分、「１人に対して、こんなに時間はかけてはいられない。余震がきたら倒壊してしまうかもしれない。」とスムーズに進まない活動に対し、焦りと苛立ちがあった。

そして、３人を屋外へ搬送した時、最悪の事態は起きた。１時 25 分、震度７、マグニチュード 7.3、益城町を震源とする地震が発生。後にこの地震が熊本地震の本震と知らさ

れる。

私は、病院が倒壊すると思った。体は隣接する道路まで吹き飛ばされ、緊急時には警笛を鳴らすと隊員に約束していたが警笛すら吹けない。現場では悲鳴と地響きしか聞こえない状態で、平衡感覚を失い、立ち上がることもできず、消防車同士は衝突、初めて死を覚悟した。

10 秒ほどで揺れが収まり、病院内に隊員を進入させていた私は、隊員の名前を大声で叫んだ。隊員が無事に病院内から脱出してきたときは、申し訳ない気持ちで一杯であった。

態勢を整え直し、隊員たちに気力を与え、再度病院内に進入。私自身も活動に入り、無我夢中で搬送を行った。

その後も震度６クラスの余震が数回発生し、私たちの活動を何度も妨げた。

２時 20 分、気付けば入院患者 30 人全員の搬送が完了していた。

想定外のことが発生し、私を含め殉職してもおかしくない現場であった。同時に生きて帰ることの大切さを改めて教えられた。

今回の地震は、全てにおいて私たちの力をはるかに上回っていた。しかし、今後発生する災害に対し、誇りと覚悟を持って立ち向かうために、この体験を風化させることなく後世に伝えていく必要があると痛感する。

熊本地震を振り返って

東消防署　警防課　課長代理
消防司令　髙鍋弘幸

約 30 年前、「これが布田川断層帯です。活断層なので、近い将来大きな地震が発生する恐れがあります。」当時、布田川断層の調査チームの一人が強い口調で説明した。

確かに、削った斜面にズレが生じているが、私を含め当時参加した防災関係者のほとんどは危機迫る思いはなかっただろう。

しかし、その予測は見事的中した。

平成 28 年４月 14 日 21 時 26 分、震度６弱。

４月 16 日１時 25 分、震度７。

私が経験した熊本地震である。

阪神淡路大震災の火災が頭によぎった。

前震直後すぐに自宅を飛び出し、地域の消防団詰め所へ向かった。駆け付けた１人の団員とともに車載マイクで注意喚起を呼びかけながら地域を二巡し、安全が確認できたので、すぐに勤務地である東消防署へ急いだ。

到着すると、当務隊は全て何らかの事案に出場中であり、次々と参集してくる非番職員は、４人一組で車両を配置し、続々と入る非常災害に出場した。

東指揮隊は、益城町安永における建物火災と家屋倒壊による救助事案に出場中で、一部指揮隊と現地にて交替する。

中隊長を救助現場へ、私が火災の現場指揮を執った。夜を徹して活動し、闇も白み始める頃には、熊本県相互応援協定に基づいた各消防本部の応援部隊が続々と指揮車の横を通り抜けて行った。

その日の午後、私は益城町の庁舎４階の災害対策本部にいた。役場周囲を見渡すと、地震の規模に比べ、被害が少なかったことに安堵したことを記憶している。

しかしそれは、前震に比べ全く次元が違う猛烈な揺れの本震が起きる前兆であった。疲れ果てた体を休める暇もなく悪夢の本震がきた。自宅で就寝中、体の上に洋服ダンスなどが折り重なり、自宅が倒壊したと思った。体に痛みを感じながら、脱出に約 10 分を要した。

暗闇の中、家族を残し、東消防署へ急いだ。前震と比較にならない事案が山のように押し寄せた。非常災害対応の職員は、スコップやバール片手に輪番を組んで出場した。そして、全身真っ黒に汚れ帰り、疲労を隠すように次の事案に出て行った。

記録を後世に伝えるために

東消防署　指導課　予防班
消防士長　堀川稔晃

【発災当時】

私は、前震発生時、その日に行われた会議の議事録を作成するために、21 時過ぎまで残業していました。更衣室で着替えを済ませて帰宅しようとした際、ぐらっときたので「地震？」と思った直後、とてつもない揺れが東消防署を襲いました。急いでヘルメット等を引っ張り出して着替えました。着替えている最中、指令放送が流れ、震源が益城町であることが分かりました。熊本に活断層があることは知っていましたが「まさか、熊本でこんな大きい地震が起こるとは！」と思ったのが、そのときの率直な感想でした。

【非常災害対応準備】

熊本地震発生当時は、益城町に隣接する熊本市東区の東消防署で勤務しており、管内の被害が大きいことが予想されました。

非常災害の訓練は何回か行ってはいたものの、日勤としての対応は初めてだったため、当務隊の課長代理に指示を仰ぎ、研修室に置いてあるホワイトボードやその他道具の準備に取りかかりました。

私は、地震の約１年前の交通事故の怪我が原因で災害現場に出場できなかったため、とても歯がゆい思いでした。しかし「今できること、今やるべきこと、今しかできないこと」のため、粉骨砕身することを誓いました。

【出動隊の食料・飲料水の確保】

集まってきた職員が隊を編成し、出場していくのを見て、飲料水と食料の確保を考えました。飲料水は東消防署に備蓄してあった飲料水と、備え付けの自販機から購入した飲料水を調達。また、活動が長期化することを考え、非常食のカンパンを出場隊へ持たせました。カンパンを持たせた際に「いらない」という職員が多数でしたが、後で話を聞くと「必要だった」という職員もいました。

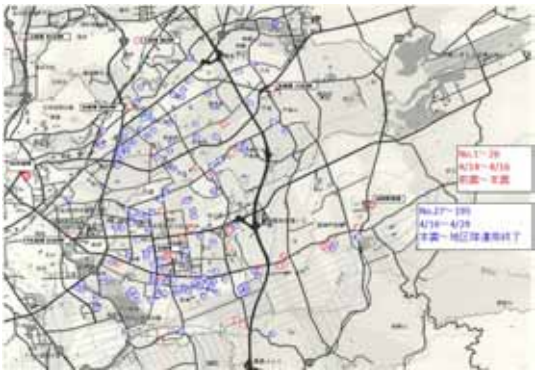
【災害対応と状況整理】

各隊からの活動が無線を通して続々と報告される中、状況整理を行うホワイトボードは文字で埋め尽くされようとしていました。そこで、ホワイトボードに貼っていた地図は剥がし、体力錬成用の卓球台に乗せて作業スペースを確保。また、事案の整理を行うために、①ホワイトボードに記録する係、②パソコンで時系列・状況を整理する係、③無線連絡をする係、④報告書に打ち込む係の４班に入り乱れている状況の整理を行いました。

そんな混乱の中、この地震の状況を記録するために、ＩＣレコーダーのスイッチを入れ、東消防署の災害対策地区隊本部に置きました。また、その数分後にビデオカメラがあったことを思い出して定点で設置、今回の地震の状況を後世に残すために、災害対応を記録するビデオの撮影を行いました。

【データの見える化（災害対応状況地図）】

状況整理を行う中で、文字のみのだと被害状況が分かりにくいことに気付きました。ぱっと見て状況を把握しやすいのは、やはり地図です。状況整理を行う過程で災害を番号で管理していたので、それを地図上に落とし込むことで、被害が多い地域がどこなのか、どこに人員を投入するべきなのかを判断する材料になりました。



東消防署災害対応状況地図

【ハザードマップの有用性】

東消防署では、生存率が低下すると言われる 72 時間以内に管内全ての家屋を調査しました。

調査を行う中で、家屋の被害を地図上に落とし込みました。前述で作成した被害状況対応地図と家屋の被害は、ほぼ一致していましたが、災害対応は少ないのにもかかわらず、家屋被害だけが目立つ地域があり「何故だろう？」と私は疑問を持ちました。その家屋被害をハザードマップに落とし込むと、まさにハザードマップの予測と酷似した被害状況が浮かび上がりました。

この考えは熊本地震の前年に受講した『自主防災組織育成短期コース』で山口大学の瀧本浩一先生から学んだものであり、ハザードマップの有用性を示す資料となりました。

ハザードマップは減災を目的としたものであると個人的に解釈していました。しかし、発災時にも被害状況等を端的に予測することができるものであることに改めて気付かされました。

ハザードマップ(熊本地震の被害を反映)

【記録ビデオの作成】

前震（４月 14 日 23 時 40 分～４月 15 日３時 38 分、撮影時間：３時間 13 分 05 秒）と本震（４月 16 日２時 30 分～４月 16 日 11 時 39 分、撮影時間：７時間 52 分 56 秒）合計で約 11 時間撮影を行い、その後ビデオを閲覧確認し、時系列を作成するとともに、簡易的な閲覧及び情報伝達を目的としたダイジェスト版（約 13 分にまとめたもの）を作成しました。ビデオ及び時系列については、その後状況を確認する上で大いに役立つ資料となりました。

今回作成した資料が、今後全国各地で起こりうる災害の教訓となり、被害の軽減に少しでも繋がることを切に願います。

４月 16 日３時 02 分（記録ビデオ抜粋）
益城町寺迫　倒壊家屋より３人救出

消防吏員という職業

西消防署　警防課　計画管理班
消防士長　甲斐千裕

平成28年４月14日21時26分、バレーの練習を終えたばかりの私は、体育館で強い揺れを感じました。

災害情報メールで「震度6弱」の文字を見た瞬間に、自主参集で職場に行かなければならないことは容易に判断できましたが、練習には小学１年生の娘を連れて行っており、恐怖で私にしがみつき、「怖い」と訴える娘に監督宅で待機するよう説得することは容易ではなく、心が痛み、不安もありました。

しかし、娘を監督にお願いし、職場へ向かいました。

署に到着すると、すでに３階の体育訓練室に多くの住民の方が避難していました。余震も頻発していたため、揺れが起きるたびに悲鳴が響き、寝ている子供の頭を守る保護者の光景が印象的でした。

時間の経過とともに、避難者も増え、提供する毛布の不足、一緒に避難してきたペットの扱い、断水のためトイレが使用できない、エレベーターが設置されていないため車いすの方や高齢者の搬送を職員で行わなければならない等、様々な問題も浮上してきました。

さらに、体育訓練室への避難者が増え続けたため、職員の仮眠室を開放するように署長からの指示もありました。対応にあたっていた職員で話し合い、年齢の低い子供を持つ家族（保護者は女性に限る）から順番に仮眠室へ案内しましたが、中には、家族全員で移動したいと訴える方もいました。

しかし、「より多くの子供たちを仮眠室へ案内し、畳の上で休ませたい。授乳が必要な子供に安心して母親が授乳できる環境を作りたい。」この思いで、女性の保護者と子供に限定にする対応を取りました。

そして、避難所となった体育訓練室が落ち着き始めた頃、私は、自分の携帯を開きました。県外にいる両親や友人から心配するメールがたくさん届いており、その中に娘を預けている監督から「(監督の)旦那も子供も帰って来た！ヘルメットも用意している！娘は、何があっても守るから安心して仕事をしなさい！」とのメッセージがありました。監督への感謝の気持ちとともに、寂しい思いをさせている娘への申し訳ない気持ちが込み上げましたが、このときは、自分の職務を全うしなければならないという使命感が強かったように思います。

夜が明け始めると、避難してきた子供たちが徐々に目を覚まし始めたので、防災訓

練等の記念品の折り紙を子供たちに配りました。一瞬でも地震の恐怖や不安が和らげばと思い配布しましたが、子供たちの笑顔に私の気持ちが和んだことを覚えています。

朝からは、避難している方へ非常食のアルファ米を提供し、その後、全員が帰宅していきました。

夕方には、私も帰宅が許されたため、すぐに娘を迎えに行き、帰宅後は、余震に備え寝室にヘルメットと靴を準備し、いつでも出勤できるように動きやすいジャージを着て眠りに就きました。

そして、予想だにしなかった本震が発生。

前震とは比べものにならない恐怖を感じ、横揺れが大きく、長く、なかなか起き上がることができませんでした。揺れが収まると、準備していたヘルメットと毛布を娘に被せ、停電して真っ暗な中、散らばってしまった物を避けながら家の外に出ました。「怖い、怖い」と震える娘に「ママがいるから大丈夫！」と言う自分の声も、あまりの恐怖で震えていました。すぐに出勤しなければならないけれど、この状況で娘を誰かに預けることは難しく、正しい選択ではなかったのかもしれませんが、娘を連れて、出勤する決心をしました。歩きながらも感じる余震。タイルや壁が落ちているビルの前を通る際は、娘の手を引いて走りました。避難所へ向かっていた友人家族には、「こんなときに本当に仕事に行くと？一緒に避難所に行こう！」とも言われましたが、「消防職員は、こんなときだからこそ行かなんとよ。」と友人に言い、そして自分にも言い聞かせていました。

署に着くと、すでに多くの職員が参集し、活動を始めていたので、娘を事務室の応接ソファーに座らせ、私は情報収集等の業務にあたりました。

本震後も、体育訓練室へ避難してくる住民の方はいましたが、前震時の半分以下となっていました。前震時に、消防署は指定避難所ではないため支援物資等の配給がない旨をお知らせしていたので、指定避難所へ避難されたのではないでしょうか。

夜が明け、ニュースで熊本城の状況や阿蘇大橋の崩落等を見たとき、本当に大変なことが起きてしまったと実感しましたし、ガスと水が使えない自宅に帰ったときには、当たり前の生活を送れることの有難さを痛感しました。

今回、発災直後から連日、災害対応業務にあたりましたが、友人、親戚等、沢山の身近な人達の協力や支えがなければ、私は消防吏員として、業務を遂行することはできなかったと思っています。今は、私が消防吏員として働くことができる環境づくりに協力してくれた全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、この地震で亡くなられた皆様のご冥福をお祈りするとともに、１日も早い復興がなされることを願っております。

災害の経過とともに変化する救急出場

西消防署　警防課　救急小隊
消防士　福原華乃

救護者であり、被災者となったあの日々は、今でも忘れることができません。

熊本に突然襲いかかった二度の大きな地震は、尊い人命を奪い、建物を倒壊させ、私たちの心に大きな爪あとを残しました。

この被災地となった熊本で、私は数々の災害現場に出場しました。

震災直後には、倒壊した家屋に下半身が挟まれた女性の救助事案や大きく亀裂が入り、傾き、エレベーターが停止したマンション高層階からの搬出など、とても現実とは思えないような事案が休む間もなく発生しました。

発災後 72 時間が過ぎ、災害が超急性期から急性期へと移行してきた頃には、災害現場より避難所への出場が大半を占めるようになっていました。

その要請内容の多くが、通常であれば適切とは言えない軽微な発熱や、薬が切れたため病院へ行きたいという訴えや、中には不安で眠れないといったものなど、救急隊が駆けつけて話を聞くだけで不搬送となった事案もありました。

通常であれば不適切、そう思われるような事案がなぜ、避難所で多く発生したのでしょうか。私は２つの要因に着目しました。

まず、避難所では医療機関の開業状況がよく分からないということです。

地震による倒壊や断水などにより、休診となっている医療機関も多いことに加え、自宅

から離れた避難所で生活している方もいるため「どこの病院へ行けばよいのか分からない」との理由から救急要請した事案も少なくありませんでした。

２つ目は、避難所の支援にあたる職員が、これまで災害支援に関する研修などを受けたことがなく、被災者の抱える不安に十分寄り添う準備ができていなかったのではないかということです。余震が続く中で感じた何とも言えない不安な気持ちは、被災者となって私自身初めて知ることができましたが、当時は自分のことで精一杯だったように思います。

さらに、家族や地域と離れ、避難所生活を余儀なくされている方は、傷病者情報がなかなか把握できず、救急活動に時間を要したことも課題の１つです。

このことから、私は、このような大規模災害は、長期的なケアが必要であることを強く感じました。

避難所で被災者がどのような不安を抱え、どのようなケアが必要かといった精神的ケアについても学びを深め、それを普及させていく必要があると思います。

救護者でありながら被災者でもあり、災害支援者でもあったあの日々を私は決して忘れません。

この経験をこれからの業務にも生かし、傷病者の心に寄り添えるような強く、優しい救急隊員を私は目指します。

熊本地震に思うこと

1　城南出張所での活動について
2　活動中に感じたこと
3　震災体験を通じて

南消防署　城南出張所長
消防司令　田上洋介

1　城南出張所での活動について

①前震時の活動

平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分、熊本で最大震度 7 の地震が発生した。

私が、城南出張所に駆け付けた直後、職員が慌しく出場準備をしている中、21 時 40 分に、子供が割れたガラスで負傷したと男性が駆け込んできた。

この救急出場から、地震による活動が始まった。

引っ切りなしに強い余震が続き、次々に 119 番通報が舞い込み、ポンプ車と救急車が休む間もなく出場して行った。

出張所には「家族の安否確認や避難所へ一人暮らしの母を誘導して欲しい」等の電話が多数あり、その都度、第 12 方面隊の各校区の消防団員が率先して巡回し、確認しながら住民の避難誘導活動を行った。

私たち消防隊は、たび重なる出場に交替で車両に乗り込みながら朝を迎えることとなった。

②本震時の活動

4 月 16 日 1 時 25 分、思いもしなかった、より強い本震が発生した。

私は、道路の激しい揺れを感じながら城南出張所に向かった。

出張所では、職員が被害状況を確認しながら出場態勢を整えていた。

その時、災害現場を巡回中の消防団員から携帯電話で「民家が崩れ、男性 1 人が閉じ込められている」との連絡が入った。

現場は道路狭隘地区であったが、道路は通れるとの情報だったので、消防団に誘導をお願いして出場した。

現場に到着すると、付近は停電し、真っ暗闇で、消防団の誘導で民家に着くと、建物は倒壊しており、その建物の中から男性の声が聞こえた。

余震の続く中、消防団は照明の準備を行い、消防隊は懐中電灯を頼りに建物内を検索し、男性を発見して、救助することができた。

幸いにも、男性はかすり傷程度で、救急隊の観察後、家族の元へ戻った。

（救助現場）

２　活動中に感じたこと

今回の熊本地震で考えられないような多くの経験ができた。

①出場態勢の重要性

前震が発生したとき、消防車両は車庫内にあり、シャッターが崩れ落ちかけていることに気付いた職員が、消防車をいち早く車庫前に出し、その直後にシャッターは壊れ、開閉不能となった。

もし､この時､消防車を出せなかったら、その後の災害活動に支障が出たのは間違いない。

また、本震時の救助現場は、山手の地域で地形に詳しい職員の誘導により、迷わず現場に向かうことができた。

このとき、車両を動かせる態勢と地形調査の重要性を痛感させられた。

②消防団との連携

震災時は、まだ肌寒い夜だった。

出張所に避難された住民のために、消防団員によって、城南まちづくりセンターから災害用毛布が搬送され､被災者に配布し、対応することができた。

震災活動は、私たち消防職員だけでは到底できることではなく、地元消防団との連携した活動が不可欠だった。

連携して協力した活動があったからこそ、災害活動だけでなく、早期の住民の安否確認、避難誘導、そして支援物資等の配布ができたのだと思った。

消防団の皆様には、ご自身も本当に大変なときだったと思いますが､｢地元のために｣との気持ちで活動されたことに頭が下がる思いである。

３　震災体験を通じて

震災を体験して私たちは、多くの皆様から励ましや感謝の言葉をいただきました。

今後、このときの気持ちを忘れずに、消防団、自治会の皆様、城南まちづくりセンター等の関係機関との連携を更に深めながら､｢安全安心なまちづくり｣を目指して行きたいと思います。

今後、被災された方々の復興が早く進み、安心して暮らせる日が一日でも早く来ることを、心より願っております。

希望への一歩～今一度、リセットする必要性～

※富合出張所管内は、周囲を田畑に囲まれ、のどかで
古い家屋が建ち並び、建物の被害はあったものの、
人的な被害は少なかった地域です（仮設団地２ヶ所、55戸）。

南消防署　富合出張所長
消防司令補　鍋田貴夫

1　地震発生～初期対応について

平成 28 年４月 14 日 21 時 26 分、突然、**「ドーン」**と足裏を突上げた、と同時に**「胃がギュット・・・」**。**「これは、ただ事じゃなか！」**

今から 21 年前、私が阪神淡路大震災での災害活動時に、震度５以上の余震が容赦なく襲ってきた時の記憶が、突然**「フラッシュバック」**した。

まず、家族と近所周囲へ声かけをし、**「車内で身の安全を守れ」**と指示して職場へと向った。

富合出張所へ到着すると、職員の安全、消防車両、庁舎内外、ライフラインの被害状況をチェックし、出動態勢に支障ないことを確認した。

さらに、富合校区 22 人の自治会長宅へ電話連絡し、町内放送で**「緊急事態発生、緊急事態発生、住民の皆さんは、車の中へ急いで移動し、命を守る行動をして下さい。」**と、呼びかけるよう指示した。

2　消防団との連携について

人員、車両、資機材等はもとより、被害の把握のためにも、地域に密着した消防団の力が必要になると考え、情報共有と連携を図るため、**11 方面隊山本副団長に連絡して当所に詰めてもらい、**消防団員の初動対応として、各団積載車で町内での緊急性の高い事案を確認し、優先的に活動するよう副団長に指示をお願いした。

さらに、出向消防団と密に連携を取れるよう、各積載車の責任者の**携帯電話**を利用し、円滑で効率的な災害活動を実現することで、**各隊の連絡体制**という重要な問題点が１つ解決した。

当所の職員は、自主参集を含め 19 人、私と隊員１人（記録員）を所内残留とし、ポンプ車４人、救急車４人及び軽消防車４人で隊編成すると、残り５人は、災害事案が発生しても、職員の搬送手段がないため、山本副団長にお願いし、**至急、当所へ団積載車５台を集結**させてもらい、災害対応と警戒のため巡回エリアを設定して職員を各団積載車で出向させることとした。

巡回中、木原地区で骨折している住民を分団員が発見し、救急要請の連絡を受けたが、生命に危険がないと判断し、そのまま団積載車で医療機関へ収容するよう指示をした。

この時、消防団との連携によって、負傷者を無事に病院へ収容したことが、**全体の士気のアップに繋がった**ことを確信した。

3　区役所との連携について

今回の地震では、区役所との連携がほとんどできない状態だったので、将来的なイメージとして、電話回線が使える場合は、

各校区の隣保班→組内→自治会長→連合会長、そして区役所、更には熊本市役所（危機管理防災総室）へと**情報を一本化**することで、被害内容の優先順位を消防が得た情報と合せて精査し、スピーディで有効的な災害トリアージが実現できるのではないだろうか。

4　署地区体制での多数事案発生時の円滑な災害把握の充実について

今回の地震のように災害が多く発生した場合、自主参集した人員に対する車両台数や災害事案の危険レベル、現場出向者、さらに現場を転戦した際の動態管理及び資機材の保有残数等を把握して、時間差で招集した職員も現在の状況が瞬時にイメージでき、災害事案に対する対策や手段が確実に実行できるよう、**「目で見て、理解できるパネル」**の有効性を痛感した。

作成例

5　これからの消防士へ

近年、想定を越えた自然災害が多発し、更に増加する傾向がある。

今を先走りせず、失敗を恐れずに、災害現場での経験を積み重ね、その経験を未来への糧として、いつか来るかもしれない「その時」に備え、一人でも多くの命を救い、**殉職者を絶対出さない職場づくりの１歩を希望する。**

また、何事にも客観的な冷静さを持ち、緊急時ほど、**一度リセットする気持ち**も忘れずに。

6　結びに

「備えあれば憂いなし」よく耳にする言葉ですが、前文があるのをご存知でしょうか。

「安きにありて危うきを思う、思えばすなわち備えあり、備えあれば憂いなし」とあります。

備えて安心するだけではなく、平穏なときこそ危機感を持ってあらゆる災害を想定し、考えることが重要であり、あわせて、**必要な備えも見えてきます。**

平成 28 年熊本地震を経験した今、あの時の経験を活かすことが、**これからの希望への一歩だと信じます。**

「目で見て、理解できるパネル」使用方法（例）

1　非常災害時において、無線、トランシーバー及び全ての車両（実働車以外）の鍵を準備する。

2　招集された人員をネームプレートを活用して班編成し、災害事案内容に適した車両、出向責任者、隊員、無線及び資機材等を管理する。

3　災害トリアージ（赤・黄色・青）の危険レベルを色別シートで管理し、緊急性と状況の変化を確実に把握して精査の継続で災害事案が完結するまで管理する。

活動手記

～熊本地震を経験して～

南消防署　警防課　特別救助小隊
小隊長　消防司令補　西村義盛

【前震】

平成 28 年４月 14 日 21 時 26 分、突然、熊本地方を震源地とする M6.5、最大震度７の強い地震が益城町を中心に熊本市全域を襲った。

自宅にいた私は、今まで経験したことのない揺れに動揺しながらも、テレビで震源地と震度を確認し、地震の恐怖に怯える家族を残して職場へと向かった。

職場までの道のりや被害状況を確認しながら進むとブロック塀が倒れ、自動車販売会社のショーウインドのガラスが粉々に割れているものの、負傷者等は確認することなく職場に到着した。

職場は、棚や机の上に置かれていた物が散乱し、当務していた職員はその散乱した物に構う暇もなく、慌しく被害状況等の情報収集に追われていた。余震は続き、災害指令は断続的に流れたが、私が出場することはないまま朝を迎えた。

４月 15 日８時 30 分勤務交替し、被害の大きかった益城西原消防署の応援に出場した。

益城町では、倒壊家屋からの逃げ遅れ及び負傷等の捜索を徒歩で行いながら、被害の甚大さを改めて実感させられた。

捜索したが負傷者等は確認できず、日が暮れる頃に帰署することとなった。

帰署後、前日から仮眠すらとれていなかったため、隊員に早めの休息をとるよう指示し、私も休息に入った。

【本震】

４月 16 日１時 25 分、M7.3 最大震度７の本震。

仮眠をとっていた私は、予想していない大きな揺れに起き上がれなかった。

揺れが収まるのを待ち、事務室に上がると一昨日と同じで、棚や机の上に置かれた物が散乱していた。

直ちに車両を車庫外に移動させるため、車庫に降りたところ、「建物が崩れ、人が閉じ込められた」と、近隣の住人が駆け込んで来た。

車両で現場を確認しに行くと、２階建て住宅の１階部分が倒壊していたが、住人は２階に就寝していたため、無事を確認し、一旦帰署することとなった。

【現場救出活動】

帰署後、西原村布田の救助事案に出場との下命を受け、装備を確認し、５人で出場した。

出場中、逃げ遅れ５人と情報が入り、隊員に活動方針を指示した。現場に向う途中の道路は地震で隆起し、所々に電線障害や陥没が見られ、緊急走行に苦慮しながらも現場付近まで到着することができた。

私は地震発生の２年前、熊本市との消防事務受託に伴い、旧高遊原南消防本部（現在の益城西原消防署管内）へ２ヶ月間派遣出向していた経験もあり、西原村の主な地域の地形は記憶にあった。しかし、目に映ったのは、当時の面影はなく、道路脇の家屋が多数倒壊

し、巨大な石が道路を遮断している惨状だった。

現場までは道路狭隘のうえ、地震で道路脇の石垣が崩れ、約100m手前までしか車両は進入できず、その場から必要最小限の資機材を搬送するよう指示し、現場に向かうこととなった。

現場を確認すると木造２階建て住宅の１階部分が完全に倒壊し、関係者によると住人５人中４人は避難しており１人が倒壊家屋の中にいるとの情報だった。（図①）

直ちに、隊員４人を２人の２班に編成させ、倒壊した１階部分の検索を指示した。

余震が続く中、進入口及び退出路を確保し、声かけを行いながら倒壊建物内に進入、退避を数回繰り返した後に、ベッドと梁に挟まれた状態の要救助者を発見することができた。

梁の除去を試みたが、狭所空間で活動は難航し、時間を費やしていたところ、緊急消防援助隊の鹿児島県隊が到着した。

活動人員が増えたため、鹿児島県隊長と協議し、救出方法を変更することとなった。

要救助者の直上部の瓦を除去し、屋根部分に２m×３mの開口部を作成し、余震による倒壊からの二次災害防止、救出、退出路の確保を実施、要救助者が挟まれていた梁を切断し、現場到着から約２時間後に要救助者の救出完了に至った。

【まとめ、所見】

私を含め５人の隊員による、熊本地震の活動はこの１件のみだったが、非常に内容の濃い事案で貴重な経験となった。

この活動を経験し、救助隊長として参考にして欲しいことがある。

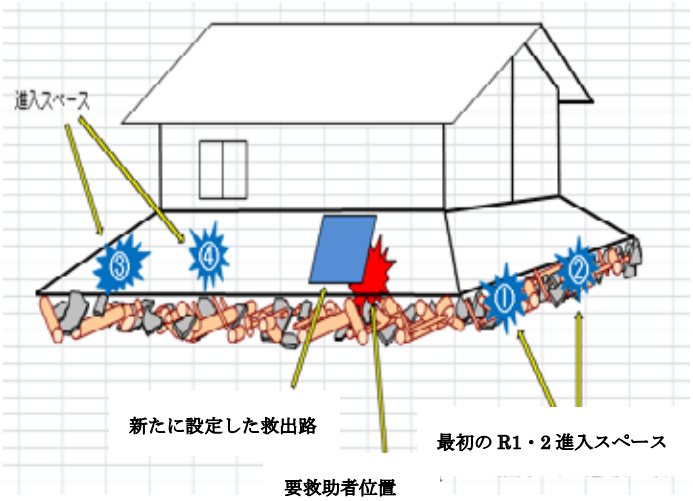
私をはじめ、隊員全員がこれまでに経験したことのない現場であり、余震が断続的に起こるという悪条件下での活動であったが、隊員が二次災害に遭わず事案を完結できた。

それは、隊員各自が倒壊家屋内で活動した際に退出路を確保し、隊員同士の声かけ等、安全確保を最優先に行った結果だと思った。

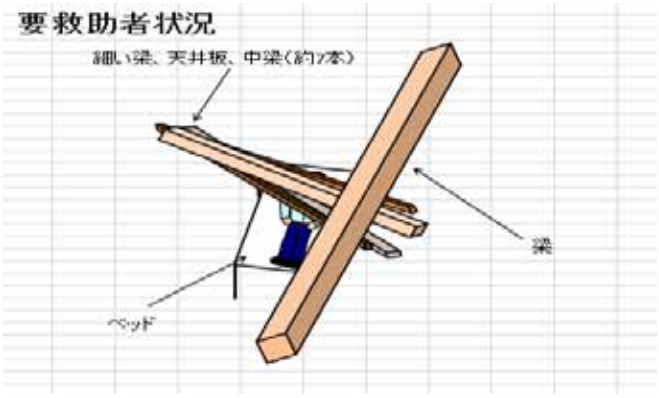
さらに、緊急消防援助隊等の人的増加によって、救助活動がスムーズかつ確実にできたことだ。

この２つのことを、これからの災害現場、または、今後起こりうる大地震に出場した際に活かして欲しいと思う。

①



②



熊本地震本震直後の建物火災

～消火栓断水！！使用不可～

北消防署　警防課　救急救助主査
消防司令　小山幸治

まさか・・・え、自分の感覚が麻痺しているのか。身体が震えた、庁舎も揺れていた。何も言えない自分がいた。

またか・・・え、２回目の大地震。

２日前の前震を受け、消防局の近隣にある自宅を飛び出し、北署に駆け付けて震災対応及び緊急消防援助隊の受入れ準備を行った。前震から 24 時間が経過した。ふと外を見ると、やたらと静かで余震はあるが、このまま終息に進み、復旧・復興に向け一歩ずつ歩んで行くのだな、と・・・思ったその数時間後だった。

前震から約 28 時間が経過した、日付が変わった 16 日１時過ぎ、再び２回目の大地震が発生したのだ。情報司令課も大打撃を受け全てが混乱していた。直ちに署地区隊運用となり、庁舎及び車両の点検と署員の班編成に追われた。無線では 119 番通報多数、消防車両も多く出場し、震源地である益城町を中心に東指揮隊、中央指揮隊、南指揮隊と出場した。後に分かったのだが前震（震度７）本震（震度７）２回もの大地震が熊本で発生したのだ。

本震発生から２時間後、建物火災の出場指令が庁舎に響いた。現場はどこだ、延焼中か、進入経路は、水利状況は、との思いが頭を過ぎった。すぐに大隊長と言葉を交わすと、大隊長も同じことを考えられており、自然と大隊長下命の活動方針が予想できた。道路状況等は指揮隊長が完璧に把握していたが、現場までの走行時に障害物等があるかもしれない、慎重に行け、口調が強くなった。管内を抜け、他署の管内へ車を進ませた。建物は倒壊して数多くの避難者を見かけ、信じられない光景が続いた。

現場に到着、災害点は２階建。２階部分から黒煙が噴出中、すぐに通報者と接触した。情報によると夜間は無人の事務所だった。逃げ遅れ者もいない、少し安堵したそのとき、爆発音とともに大量の火炎が噴出した。先着消火隊に注水部署及び三連梯子を使用した火災防御を命じた。後着した消火隊から消火栓が断水により使えないとの一報が、予想はしていた。タンク車を集結させ、ポイント注水戦術を大隊長が無線で指示された。出場隊も限られ、救助隊もいない、限られた人員で有効な活動を行う、自然と身体が動いた。指揮隊長とともに、１階玄関の強化ガラスを破壊し、火点である２階に向かうと濃煙熱気、だが中性帯がくっきりと確認できた。これまでにないほどの有効なポイント注水ができ、延焼拡大も阻止し、２階部分のみの焼損に留めた。雨が降り始め、一滴目に入った瞬間、被災者及び活動中の同士の姿が頭に浮かんだ。何も言えない・・・。

出動態勢を整えて引き揚げようとした時、阿蘇大橋崩落の情報を耳にした・・・。

万一に備えて

～座屈建物からの救助活動を終えて～

北消防署　警防課　特別救助小隊
消防士長　古川怜

４月 15 日は当務日だった。朝からいつものように当務明けの救助隊から申し送りを受けた。内容は、14 日の夜に起こった地震（前震）に伴う益城町安永での救助活動だ。

地震災害においての救助活動。もちろん、私も経験がないため、今後のためにとの思いで、どのような活動であったのか、苦労したことなどを詳細に聞いた。

まさか、このときに共有した教訓を、その日の夜に活用することになるとは思いもよらなかった。

その瞬間を待機室で迎えた。まさか、また、地震（本震）がくるとは、そう思いながら即座に出動態勢を整えると、しばらくして、私たち北特別救助小隊にも指令が下った。「木造建物が倒壊し、２人が閉じ込められている。」との情報を得た。

現場は熊本市東区保田窪、到着までしばしの猶予がある。出場途上には、準備資機材や活動方針を活発に議論した。エンジンカッター、チェーンソー、ライト・・・その他に私は、ハンドタイプのノコギリを持っていくよう指示した。狭隘空間や、可燃性ガスの漏洩があった場合には火気厳禁となり、エンジン系の機材が使えないことが予想されるためだ。

これは、前夜の教訓を活かしたものだ。

現場に到着すると、木造平屋の建物は原形を留めておらず、完全に座屈していた。若干、ガスの臭いがした。私は、マイコンメーターの表示を見た。ガスの漏洩を示す表示はなく、危険な状態でないことは判断できた。これも以前、ガス事業者から研修を受け、知識を得ていたので役に立った。

座屈した建物の下には２人の要救助者がいた。呼びかけに反応はある。「頑張ってくださいね。いま助けますよ。」終始呼びかけを行いながら、ノコギリと手作業で瓦礫を排除し、救出にあたった。１時間ほど活動しただろうか、高齢夫婦の２人はテーブルの下に身を潜めていた、奇跡的に無傷での救出完了となった。

ほっとしたのも束の間、私たちは、エレベーター閉じ込め事案に転戦することとなった。エレベーター関係者は現場にいない。ここでも、以前受けたエレベーター研修での経験が役に立ち、無事に４人の要救助者を救出することができた。

日頃から、災害対応能力の向上のために、知識技術の習得、教訓や事故事例の共有が大切であると痛感した。私たちは努力を惜しんではならない、万一に備えて。

熊本地震の記録

益城西原消防署　警防課　救急救助班主査
消防司令　岩木利仁

地震から１年６ヶ月が経ち、当時の記憶や想いも徐々に薄れていく中、当時のことを振り返ると、色んなことがあったのを思い出します。

地震直後から、無我夢中で活動してきた私たちは、この体験を通じて色んなことを学びました。

自然の中で生かされていること、現場での災害活動、人と人との繋がりなど。

この体験を風化させないためにも、頭に強く残った当時の想いを書き残したいと思います。

前震後、**益城町災害対策本部への出向**を命じられ、荒瀬達也士長（当時 33 歳）と２人で片手にヘルメットを持ち、ポケットに無線機と携帯電話を入れ、出向する。

到着後、今まで見たことがないような光景を目にする。

益城町役場庁舎は大きな亀裂が入り、駐車場には着の身着のまま避難してきた多くの人々が集まっている。

駐車場の片隅には、薄暗い照明で照らされた２台のテーブルと白板があり、そこに災害対策本部らしきものが設置されている。

役場職員をはじめ、警察、自衛隊、日赤などの防災機関も情報収集しようと駆け寄るが、未だ情報の集約には至らない。

私たちは、この状況を打開して情報を掴むため、頻繁に起きる余震で恐怖を感じながらも意を決して荒瀬士長とともに指揮をとる。

消防団積載マイクを持ち、周囲の人々に情報提供を呼びかける。「こちらは、熊本市消防局です。救助を必要とする方の情報があれば、こちらまで連絡ください。」

すると、すぐに行方不明者の情報や救助を懇願してくる人々が多数押しかける。

さらに、その情報を求めて報道関係者も間近に迫ってくる。

情報が多過ぎて、とてもではないがまとめきれない。

そこは、修羅場であり、まさに喧騒と混乱に満ちていた。

この環境の中、他の防災機関相手に不慣れな現場指揮をしなければならない。

しかし、手持ちの道具は無線機と携帯電話のほかなく、人手も不足している。

過酷な状況下での活動を強いられた。

数時間が経過し、携帯電話のバッテリーも底を尽き、また、喉の渇きも限界に達する中、「この状況をどうすればいいのか？」と何度も心が折れそうになったが、荒瀬士長と顔を

見合わせ、踏ん張り続ける。

それから、しばらく経つと南消防署・藤本祐二大隊長（警防課長代理　当時 50 歳）率いる指揮隊が到着。

「よく頑張った、あとは任せろ！」とねぎらいの言葉を頂く。

さらに、人目を避けるように袖裏にペットボトルまでくれた。

とてもありがたい。

本震後、**西原村大切畑集落**の倒壊家屋の救助現場にポンプ隊・田中寿一小隊長（司令補当時 41 歳）、志賀裕士長（当時 28 歳）、山村翼士長（当時 28 歳）の４人で向かう。

ポンプ車で出場し、現場まであと１ｋｍのところで道路が亀裂し隆起しているため車では行けない。

車を降り、隊員にバール、弁慶、ノコギリ、ロープなど役に立ちそうな資機材全て持って行くよう指示し、徒歩で現場に向かう。

街灯は完全に消え、現場までの道のりは暗いため、手持ちのライトを頼りに少しずつ進んでいく。

途中、大切畑ダムが亀裂しており、ものすごい勢いの濁流が道路に流れ込んでくる。

さらに、その先には直径１ｍにも達するであろう大木が、幾重にも倒れ道路を完全にふさいでいる。

しかも、その距離は不明。

志賀士長曰く「現場に行くには、ここを通るしかありません」。

先が見えない、目先の障害に対して絶望感を抱きながらも、どうするか考える。

私は、今までに消防職員として様々な訓練をやってきたが、その中で１つの訓練を思い出した。

障害突破の訓練である。

救助技術訓練にちなんだものだが、目先にそびえる障害箇所を安全、確実に、１つひとつ乗り越える訓練である。

体力、気力、精神力はもとより、現場を冷静に判断し、どんな過酷な状況下でも周囲を見る目と隊員への思いやりを忘れない。

今まさに、その状況である。

要救助者は、私たちを待っている。

安全管理に細心の注意を払い、前進することを決断する。

そこで、隊員を２人一組とし、お互い支えながら一歩一歩慎重に進むこととする。

まずは、腰付近にまで達する滝のような濁流に対し、激しい水しぶきを顔面に浴び、全身ずぶ濡れになりながらも、流れに逆らい突き進む。

次は、道路横に立ち残っている木と、すでに横倒れしている大木の隙間を余震に注意しながら、時にはくぐり、時には乗り越え約30ｍの障害を何とか突破する。

必死の思いで向こう道路までたどり着いたとき、４人の顔は一瞬安堵の表情へと変わる。

「やればできる」と思った。

その後は、救助現場にたどり着き、要救助者２人の救出に至る。

この状況下で、４人全員が怪我なく、無事戻れたことは、とても良かった思う。

私は、この経験を通じて日頃の**訓練の必要性**を強く感じた。

～地震を通して～

益城西原署総員 50 人がそれぞれの能力を活かし、**まさか**の地震に対して、何の備えもなかったが、署長から若手職員まで、皆で力を合わせ、この難局を乗り越えることができたと思う。

自宅が全壊や半壊しながらも、また、大事なときに家族のもとに行けず、町村民のため

精一杯、消防署で勤務した職員に誇りを感じるし、１人の怪我人もなく、また、御家族も全員無事であったことは、本当に良かったと思う。

地震を通じて今思うことは、３つある。

１つ目は、**人の団結**

２つ目は、ライフライン、中でも**水**はとても大事

３つ目は、**災害はない方がいい**

～終わりに～

村田正剛署長（消防監　当時 54 歳）、田中敬士副署長（司令長　当時 54 歳）におかれては、地震直後から、食べるものもなく、空腹で疲弊した署員のため、おいしいおにぎりを持ってきていただきました。

また、園田警防課長（司令長　当時 55 歳）においては、自宅が全壊したにもかかわらず、明るく毅然と振る舞い、署員の士気を維持していただきました。

とても**感謝**しています。

改めて被災者の方々の強さに感銘を受けるとともに、１日も早い復興がなされることを願っております。

熊本地震

益城西原消防署　警防課　ポンプ救急小隊
小隊長　消防司令補　松下和久

平成 28 年４月 14 日、益城町で震度７を記録した前震を端緒に発生した平成 28 年熊本地震は、私が勤務する西原村に甚大なる被害をもたらした。

平成 28 年４月 14 日、21 時 26 分震度６弱、熊本地震（前震）発生。西原村の自宅で、子供たちとテレビ鑑賞していた際に被災した。

地震が発生し、段々と揺れが強くなってきた。この地震はいつもと違う。この時、少し不安な気持ちが芽生えてきたのを記憶している。近くにいた家族全員の安否をすぐに確認し、自家用車に飛び乗り、西原出張所へと急いだ。出張所へ向いながらも、自宅周辺で大きな被害が出ていないことが目視でき、一安心であった。

職場に到着すると、非番や休みであった同僚たちも参集してきた。

そして、臨時の隊編成が組まれ、私は救急車の運用をその他隊員２人とすることになり、すぐに益城町の家屋倒壊による救助事案の出場指令を受け、出場した。

情報も段々と入ってきた、西原村では崖崩れによる通行止めはあったものの、家屋倒壊・負傷者の情報はなく、安堵したことを記憶している。

平成 28 年４月 16 日、１時 25 分震度７、熊本地震（本震）発生。職場（西原出張所）で束の間の休息である仮眠をしていた際に被災した。

「ドーン、ガシャンガシャン」、地面から激しく突き上げられるような感覚があり、庁舎のあらゆるものが転倒する物音と、断線して異常を知らせる指令機器が鳴り響いた。物が散乱し、床は足の踏み場がなかった。

一緒に勤務していた職員２人とお互いに安否を確認し、庁舎や車両の状況を把握するため、車庫に移動した。救急車の後部ガラスは割れ、ポンプ車は歯止めを乗り越え、シャッターに衝突して止まっていた。

前震とは比べものにならない猛烈な揺れの地震である。

固定無線や車両無線で呼びかけるが、どこからも応答はなく、当局管内に多数の災害が発生していることが予想された。

情報収集のため、西原村役場へ向かった。災害対策本部が屋外駐車場にできており、地元消防団や地域の住民、役場職員から倒壊家屋の下敷き情報が次々に入ってくる。

その後、すぐに出場し、細かな記憶がないほど多忙だったのを覚えている。

消防力が圧倒的に不足する中、災害対策本部に入った情報では、地元住民や地元消防団がすでに救出していたというものが、ほとんどであった。

また、西原村の大切畑地区という集落では、道路が寸断され孤立してしまい、家屋の９割が倒壊していた。その中で地元住民と地元消防団が取った行動は、家屋に取り残されている人々を自分たちでチェーンソーを使用し、屋根に穴を開けて救出し、負傷している人に応急処置をするなど地域住民の活躍があったのだ。

なぜこのような行動ができたのか？

西原村では毎年、発災対応型防災訓練があり、地域住民がその訓練の対象者となって、実際に倒壊した家屋から救出するというリアルな訓練を行っていた。

大規模災害では発災と同時に事案が多数発生するため、消防力には限界がある。

その中で訓練を生かし、地域住民や消防団で協力し、救出や応急手当など行った。

この行動は、今後の地域防災の鍵となるだろう。

地域住民や消防団との繋がりが、とても大切だと気付かされた。

これからも人と人との繋がりを大事にしていきたい。

熊本地震

益城西原消防署　警防課　ポンプ救急小隊
消防士長　小野川強

平成 28 年４月 14 日 21 時 58 分、益城町安永の建物火災の出場指令を受け、西原ポンプ小隊の小隊長として出場する。

出場の途上で、西原村にこれといった変化を感じない。しかし、益城町寺迫付近を通過したところで、情景が一変した。

悲惨にも数え切れないほどの倒壊した建物が、県道にまで押し寄せている。上空を見上げるも火煙等は確認できない。現状では大火には至っていないようだ。

また、出場途上までの２箇所で倒壊した家族に呼び止められた。倒壊した建物に家族が取り残されている。「助けてください。」無力感を感じた。

必ず消防隊が助けに来ますから、建物に入らずに待っていて下さい。言葉を残して立ち去り、出場指令現場に向かった。

現場に到着すると、益城西原ポンプ小隊が消火活動を行っていた。水利の確保を隊員に告げたが、消火栓が機能していない。

そのような時、22 時４分救助現場に出場要請がきた。火災現場のすぐ近く、倒壊した建物に赤ちゃんが取り残された模様。

２階建の家が、１階建の建物の様に倒壊していた。余震があるなか、マンパワーで瓦礫を取り除いていく。少しずつ取り除いては、余震で避難する。これでは、何時間かかるか予想がつかない。家族は、「お願いですから、隙間から建物に進入して下さい。」と訴える。胸が痛くなる現場だった。

どれ位経っただろうか、福岡県警応援隊の数十人と重機が到着し、現場を離れることとなった。

帰り際、またもや無力感でポンプ車に向かうと、石垣がポンプ車に崩れ落ちて破損していた。

時は過ぎ、４月 16 日の本震が来る。

自宅で就寝中の自分は、余震よりも長く大きく感じた揺れに恐怖を抱いた。揺れが落ち着いたときを見計らい、家族６人を避難所である小学校に避難させ、西原出張所に向かった。

向かう途中の道のりは、停電こそしているものの、特に道路等の異常は認めなかった。

到着すると出張所は騒然として何一つ元の状態になく、机、機械類等が雑然としており、救急車の後部ガラスが割れていた。

通信機器は機能不能で、どうすることもできない状況だった。

その中で、西原中学校には負傷した村民の方々が、続々と集まりはじめる。何百人いたか見当もつかない。

そこに、消防職員は６人、しかし係長級の職員がいない。いるだけの職員で、傷病者のトリアージを始め、避難してきた村民の中にいた看護師数人に協力してもらい、応急的な処置を実施。同時に重症者限定の救急搬送、さらに災害対策本部への招集。

切迫した状況が続いた。

この、数十年に一度起こるか分からない大地震を踏まえて、自助、共助、公助という言葉をよく耳にするが、災害に強いまちづくりとは何か、再度考えさせられる大災害であった。

さらに、職員誰一人経験したことのない未曾有の大災害の経験を、今後の消防を担っていく若い職員に伝え、緊急消防援助隊の応援・受援ともに経験した消防本部として、今後発災が懸念されている数々の災害に対応していく必要があると感じている。

前震にて

益城西原消防署　警防課　救急救助小隊
消防士長　古庄竜二

平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分、益城西原署で勤務中、署事務所にて談話をしていたところ、突然今までに体験したことのない大きな揺れを感じました。

事務所内は本棚が倒れ、机の上のパソコン等は床に散乱し、署内は停電しました。

暗闇の中、車両の異常の有無を確認し、出場体制を整えようとしたところ、車庫前の側溝がずれており、車両を出すのに障害になったため、グレーチングを敷き板代わりに使用し、車両を車庫から出して出場に備えました。

その後、すぐに家族のことを考えました。

「妻は無事なのか、子供は大丈夫なのか」、頭をよぎりました。

不安を抱えたまま、庁舎の被害を確認しようと、事務所に移動していたところ、ある隊員が遠くに赤く光る場所を見つけ、「あれ、火事じゃないですか」と言いました。

その後、すぐに火災指令が流れたため、出場準備を整えて出場しようとした際、消防署に駆けつけたトラックの運転手から、国道はこの先陥没していて通行できないとの情報が入ったため、回り道をして出場しました。

出場途上、家屋の倒壊しているところ、壁が倒壊して道を塞いでいるところが何箇所もあり「これは、ただ事ではない。無事に帰れるだろうか、無事に隊員を家に帰すことができるだろうか」と思いながら現場に急行しました。

現場に到着し、関係者に逃げ遅れ等の情報を求めたところ、逃げ遅れ等の情報はなかったため、ポンプ小隊のホース延長の補助にあたり、火勢の鎮圧最優先を隊員に指示しました。

しかし、ポンプ小隊が最初に部署した消火栓は断水しており、使用不能であったため、直近の防火水槽に転戦部転戦署し、ホース延長後、消火にあたりました。

防火水槽も補水機能が使えなかったため水に限りがあり、隣接建物への延焼防止を最優先に活動しました。

ある程度火勢も落ち着いたとき、現場近くで８ヶ月の乳児が倒壊建物の中に閉じ込められており、救助隊の応援が必要との情報が入ったため、大隊長判断で出場することになりました。

現場に到着したところ、建物１階部分は倒壊しており、建物全体も傾き、開口部もほと

んどない状態で、大きな余震で更に倒壊の危険性がありました。

そんな中、同隊隊員が、「許可をもらえれば、自分が進入します。」と言ってきました。

しかし、余震も続いており、さらに倒壊したら隊員も危険な目にあわせることになる、気持ちは分かるが、隊員にも家族がいるし、もしものとき、残された家族のことを考えると許可を出すことができませんでした。

後から東署救助隊も合流し、さらに県警機動隊、他県の機動隊も駆け付けたため、共同で救出活動にあたりました。

しばらくして、当隊は、大隊長判断で管内の他の災害に対応してくれとの指示が出ました。

まだ、救出途中での引揚げ命令だったので、複雑な思いがありましたが、使用資機材を撤収し、一旦帰署しました。

帰署後、上司に報告した後、家族に連絡を入れたところ、妻が「家族はみんな大丈夫だよ、仕事大変だろうけど気を付けてね」と言ってくれました。

他の隊員も家族の無事が確認できたので、一安心しました。

その後、夜が明け、数件のガス漏洩等の事案に出場し、非番員及び県内応援隊にてローラー作戦を実施して各住戸の安否確認等をしました。

その日の夕方には、非番員は自宅に帰りました。

帰宅したところ、家の中は何事も無かったかのように、片付いており、停電等も解除されていました。

色々と話を聞いたところ、妻が家族全員を一旦近くの小学校に避難させたみたいです。

その夜は、前日の疲れもあり、早めに就寝しました。

すると、まさかの２度目の大きな揺れが発生。

揺れが落ち着いた後、家族を避難させるために外に出たところ、１台の車が落ちてきた瓦で潰されており、１台は無事だったため、家族みんなで乗り込んで、近くの小学校に避難しました。

その後、消防署に自主参集し、現場対応しました。

今回の地震で、自宅は半壊し、車は１台全損しました。

家の片付けと修復には２週間ぐらいかかり、その間は、小学校の避難所及び義姉の家で生活をしながら勤務していました。

勤務のときは、妻が主となり家族を守り、家の片付けをしてくれたり、避難所では子供たちが率先して、避難者の食事の用意や水の配給の手伝いをしていました。

熊本地震を経験して、地震の恐ろしさ、家族の大切さ、家族の強さを感じることができました。

さらに、災害時における地域住民の助け合いが、必要不可欠であると再認識させられました。

「準備しないでいる事は、失敗する準備をするようなものだ」

~Fail to prepare is prepare to fail~

益城西原消防署　警防課　救急小隊
消防士長　清水健太

はじめに、この地震でお亡くなりになられた多くの尊い命に対し、心からご冥福をお祈りいたします。この手記は、発災直後から自身に生じた身体的な変化や、心境の変化などを中心に記すこととします。

－72 時間の壁－

「ズキンッ・・・！？」

湯船につけた左足に、身に覚えのない鋭い痛みが走った。東区にある入浴施設には、午前３時にもかかわらず行列ができ、あまりの人の多さに浴槽では足を伸ばすことさえままならない、まさに「すし詰め」の状態であった。入浴を終えるまでわずか数分であったが、その間大きな余震もなく、何故か痛んだ左足を除いては入念に洗い流すことができた。

「72 時間の壁」とは、よく言ったものだ。前震、本震と２度の地震が襲ってからちょうど３日を過ぎるころ、腹が減り、睡魔が押し寄せ、ようやく自分に目を向けることができた。

－夜景と違和感－

益城西原消防署から２キロほどの距離にある老健施設で、呼吸不全をきたした高齢男性をストレッチャーに乗せ、施設内を曳航中に一度目の激震に見舞われた。地下で何かが爆発したかのような音、縦とも横ともつかない、暴れるような揺れに足がすくんだ。あまりに突然のことで、身を守る行動もままならず、ストレッチャーから手を離して呆然としていた私に、向かいにいた北村士長が「倒れるぞ！」と指摘した。このときやっと、これは地震なのかもしれないという思いがよぎった。揺れが収まるのを待ち、搬送予定であった男性を収容すると同時に、施設職員に入所者の安否確認をするよう促した。救急車に積載していた防火下衣に履きかえ、私が履いていた短靴はスリッパで活動しようとしていた施設職員に提供した。入所者全員の安否が確認できたため、石原司令補、北村士長と協議、「これはただ事ではない、取りあえず帰署して情報を集めよう。」患者と施設職員１人を乗せたまま、一旦帰署する判断で一致した。自宅では、妻が子どもを寝かしつけている時間だ。緊急走行で署に向かう救急車内から、自宅がある熊本市内方面を眺めると、そこには煌々とした明かりに照らされた、「いつもどおりの夜景」が広がっていた。少しの安堵とともに違和感を覚えた。

－初動の沈黙－

署に戻ると車庫前に車両が並び、真っ暗な車庫の中を職員が駆け回っていた。皆困惑し、それぞれに動いている、といった様子だった。私は頭の中で、次のことを想起した。①震源地は分からないが、おそらく地区隊運用にな

るだろう。署単独での本部機能立ち上げと維持が必要に違いない。②体育館を持つ当署には、多くの避難者が訪れるに違いない。③グランドがある当署は、ヘリベースあるいは広域応援の拠点になるに違いない。大よそこのような理由で、車庫内に地区隊本部や救護スペース、トリアージエリアの設定が必要であると考えていた。

「プーッ、プーッ、火災　益城町　安永」

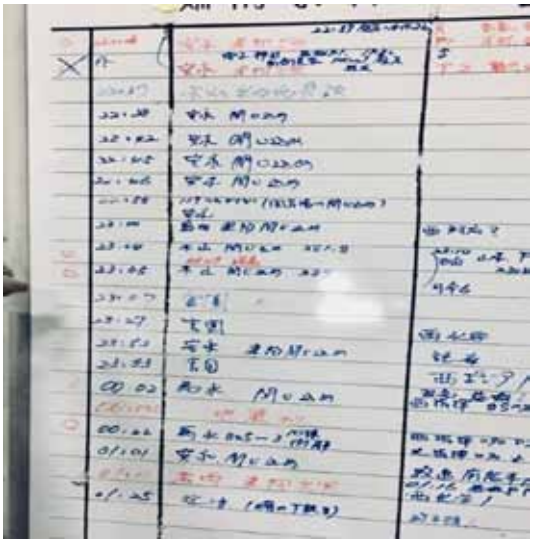
火災指令が鳴った。全隊が火災出場したため、残った我々救急隊と参集した数人で地区隊本部の設定を始めた。ところが、何分経っても署の敷地に入って来るのは自主参集した職員ばかりで、駆けつける怪我人や急病人はおろか、避難者すら全くといっていいほど来なかった。被災状況も分からないまま、しばらくは沈黙の時間が続いた。

－激震直後の益城町－

老健施設から搬送予定であった傷病者は、酸素投与で維持していたが徐々に呼吸状態が増悪して見えた。数件の医療機関に連絡したが繋がらないため、無理を承知で直接病院へ駆け込み、収容を打診することにした。ここで初めて、益城町の県道沿いを走行することになったのだが、あまりの惨劇に言葉を失った。県道上には人が溢れ、傾いた電柱、めくれあがったアスファルト、原形をとどめていない家屋に倒れたブロック塀。その１つひとつを直視できず、前だけ見て緊急走行に専念した。管内の医療機関に数件立ち寄ったが断られ、ついに熊本市内まで来ていた。最初に立ち寄った熊本市民病院で医師に状況を告げると、「診るから搬入して！」と心強い返事をもらえた。どうにか搬入し、緊急走行で署に向かった。やっと１人搬送できた。これから多忙を極めるだろう、気をしっかり持たなければならない。言い聞かせながら、再び県道を走行しているうちに、東区では道路や建物にそれほど被害がないことに気付いた。

－震源地と地鳴り－

帰署中も他事案に呼び止められた。比較的軽微な内容であったため、状況を説明して自力受診を促した。緊急走行でようやく帰署すると、立て続けに指令が鳴り始めた。ほとんどが建物閉じ込め事故であり、その全ての指令が「益城町」に出されていた。ここでやっと益城町が震源なのだと気付いた。にわかに信じ難いことだったが、前震直後から続くこの地鳴りがそれを物語っていた。



以降、重症例から軽症例まで引っ切りなしの出場が続いた。不思議と疲れはなく、目前の傷病者対応に必死になるうちに、日が明け、やがて暮れていた。危険な活動が増えると予測し、防火下衣に履き替えてから、すでに 20 時間が経過していたが、思えばずっと履きっ放しであった。入浴施設で感じた謎の痛みは、ふやけた左足に無数にできた水虫が炎症を起こしていたことが原因だった。

－激震と激震－

14 日からの当務者は、一時帰宅できるこ

ととなった。未だ疲れを感じない不思議な感覚とともに帰路についた。妻と子供は前震の後、幸い県外の実家に帰省させることができ、自宅には私一人だった。眠気はなかったがいつの間にか寝てしまっていたのだが、次に気付いた時にはすでに床は揺れていた。外に出て車のラジオをつけると、「熊本県全域に津波警報が出されました」との情報が飛び込んできた。にわかに信じがたかったが、本災害はすでに想定の範囲を超えていた。ラジオの情報を信じるかどうかの判断はもはや意味を持たなかった。アパートの８世帯全ての住人に声をかけ、自衛隊への避難を促した。最後の住人の避難を見届け、その足で職場に急いだ。熊本県を襲った２度の大地震、気象庁の発表によるところの「前震」と「本震」。２度の震度７を経験して私が思うことは、どちらも比較することのできない「激震と激震」であったということだ。

－誰かのために働けるということ－

地震から数日が経過し、連日勤務が続くものの一定の休息はとれた。ただ、帰宅しても家族は居ないし、部屋は家具などが散乱して安息とは程遠かったこともあり、職場近くの大規模な駐車場で連日車中泊を続けた。崩れる心配のない車内では、他のどこよりも深く眠りに就くことができたし、通勤にかかるわずかな時間も休息にあてることができた。それでもまた翌朝早くから出勤し、出場業務や署内の現状復帰を進めた。こんな日々を知る家族や同僚からは、「大丈夫？無理しないで。」と温かい言葉を何度もかけて貰った。その度に私は感謝する一方で、この仕事ができることをある意味「恵まれている」とも感じていた。消防士・救命士という立場のおかげで、この地震で遭遇した数々の局面を乗り切ることができた。向かうべき場所、やるべきこと、戻るべき場所が用意されていたことは、何よりの活力・原動力になっていたと感じている。

未だ各地に地震の爪あとは残っている。仮設住宅からの救急要請では、傷病者や家族から「地震以降は」というワードをよく耳にする。熊本地震は、決して収束していない。今なお震災と向き合い続ける何万もの被災者とともに、私たちも依然災害の中に居るのだということを忘れてはならないと思っている。

－消防と災害－

平成 29 年７月、九州北部豪雨に緊急消防援助隊として応援出動した。応援という立場で再び災害と向き合うことで、あのときとは違う面からその過酷さを再認識する機会となった。

消防と災害は、常に相関関係にある。災害の経験から学び、その対応法は常に研究され、より洗練されたものへと更新されていくべきなのだと私は考えている。災害は二度と起きてほしくない。しかし二度目が起きたとき、一度目が生かされていなければならない。まだ起きていない災害は、起こるものとして準備しなくてはならない。

こんな言葉がある。「準備しないでいることは、失敗する準備をするようなものだ」
私は、この震災を経て、当局が準備のプロとなる未来を夢見ている。

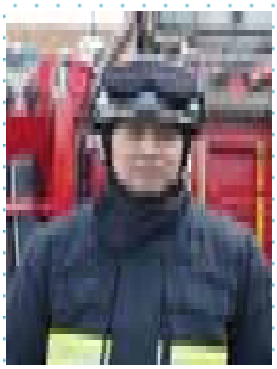
最後に、ご支援いただいた全国の消防関係者、物資等々でご支援又はご声援を頂いた全国の皆様に、この場を借りて御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

取りとめのない文章に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

初めての受援

～その立場になり見えたもの～

益城西原消防署　警防課　救急小隊
消防士　森賢太郎



忘れもしない４月 14 日、未曾有の大災害の始まりだった。その日の朝、勤務を終えた私は家路を急いでいた。９月に控えた結婚式に向け、妻と１歳になったばかりの娘と結婚式衣装の撮影をする日だったからだ。４月もまだ半ばではあったが汗ばむほどの陽気の中、撮影のため熊本新港を訪れた。風がとても強い。そこでよく撮影をするというカメラマンも、普段は風も穏やかでこんなに強い風が吹くことは珍しいと言う。今思えばこれは大災害の前兆だったのかもしれない。

その晩、それは突然やってきた。娘を風呂に入れ、身体を拭き上げた時だった。激しく揺れる食器棚と食器の割れる音で我に返る。「地震だ！揺れが大きい！」娘の頭に覆い被さり揺れが収まるのを待つ。収まると同時に家族の安否を確認した。皆無事だ。余震がくるから、と皆を外に避難させ、私は家から持ち出す荷物をバッグに詰める。非常持出袋の準備をしておけば良かった。そうこうしているうちに、テレビに地震速報が流れてきた。熊本地方に最大震度７。繰り返されるこの言葉とテロップを受け入れられない。信じられない。それほど衝撃的だったにもかかわらず、後にそれは前震であったと訂正された。娘に掛ける毛布を取りにきた妻に言う。「自主参集だ、早く行かなければ、、、！」妻は育児休暇中ではあるが、同じ消防職員である。すぐに理解してもらえたが、自力での移動手段がなかった。飲酒していたのだ。普段、晩酌はしないのだが、その日に限って訪問してきた義母とともに晩酌していた。勤務地である益城西原署までは、片道 20 キロ以上はある。タクシーを手配しようと電話するが繋がらない。繋がっても配車を断られた。いつ余震がくるか分からない状況で、運転できるのは妻だけ。悩んだ末、最寄りである南署まで妻に送ってもらった。到着した南署内は騒然としており、事態の深刻さを改めて実感する。署員の補佐に就きながら、地震によって故障したであろう、映像が映らない音声だけのテレビから更に信じ難い言葉が聴こえてきた。益城町で震度７。私が勤務する益城町が、被害の中心地であった。

一晩南署で活動し、益城西原署へ向かうため一旦家に帰ると、落下物により車庫に停めていた車のフロントガラスは大破し、バイク

益城町の道路の状況（救急車から撮影）

のガソリンタンクは大きく凹んでいた。幸いガソリンは漏れておらず、走行可能であったため、バイクで向かうことに。妻は私に「行かないで」とも「恐い」とも言わなかった。ただ一言「気を付けて」と送り出してくれた。家族の傍に居たい気持ちは互いに同じだが、私も妻も消防士なのだ。市民を守る責務がある。

道中の光景は、目を疑うものばかりだった。不自然に隆起したり、陥没したり、亀裂の入ったりした道路。地盤沈下の影響による橋両端の急勾配。倒壊した家屋。すでに通行止めになっている箇所もあった。益城町に近付くにつれ、被害はますます拡大している。ようやく益城西原署に着くと、まず愕然とした。屋内には荷物が散乱し、足の踏み場がない。更衣室のロッカーは倒れ、自分の活動服もどこにあるのか分からない有様であった。署員は対策本部となった車庫に集結し、そこで各災害に応じて隊が編成され出場している。また、逃げ遅れた人や建物に取り残された人がいないか、地区ごとにローラー作戦が展開された。私はすぐさま対策本部へ、道中の道路の状況と通行止めになっていた箇所など、知り得た限りの情報を伝える。益城西原署管内の大きな１枚パネルの地図へ自分で書き込むように指示された。皆、手が回っていない。明らかに消防力が低下している。昨夜のうちに来なければならなかった。こんなに被害が甚大だったとは、、、。晩酌してしまった自分を強く責めた。その後は救急隊として、救命士として活動していたが、あまりにも件数が多く、一旦出場するとなかなか帰署できなかった。益城町や西原村から熊本市内の医療機関までの距離は遠く、容赦ない余震や緊急地震速報の警告音に緊張し、疲労も溜まっていた。

益城西原署内の様子

休憩らしい休憩もとれないまま日も落ちてきた頃、１本の電話によりまた署内が慌ただしくなる。管内の東熊本病院が倒壊する恐れがあり、入院患者を全員、他の医療機関へ搬送する、というものだった。県内各地から応援にきていた消防本部のうち、益城西原署で野営していた救急隊にも協力を仰ぎ、現場である東熊本病院へ向かう。入院患者を救出するため院内に入ると、歩いて感じとれるほどに傾いている。気味が悪い。自分たちが動いて建物が更に傾くのではないか、今余震がきたら、救出中もそんなことばかり考えていた。

救急車５台でピストン搬送し、入院患者全員を救出する予定。当隊は１番目に救出した患者を熊本市民病院まで搬送するよう指示された。市民病院に着き、病棟へ直接搬送してくれという指示により２階へ向かう。エレベーターは作動していた。医師及び看護師へ患者を申し送り、東熊本病院へ引き返すため渡り廊下を歩いている時、それは再びやってきた。本震だった。ただただ手摺りに掴まり、揺れが収まるのを待つことしかできない。上階からは悲鳴や泣き声が聴こえた。本当に死を覚悟した瞬間でもあった。揺れが収まり、隊員間で目を見合わせた。「良かった。生きてる。崩れなかった。」と同時にとてつもな

い不安に駆られた。「東熊本病院が、、、！」３人が同時に声を張った。急いで引き返そうとエレベーターのボタンを押す。反応がない。今思えば当たり前なのだが、３人とも気が動転していた。ストレッチャーを抱えて階段を降り、外に出た瞬間３人とも声を失った。真っ暗だった。ここに着いた時とはまるで違う。異常な事態を前にして隊長が言う。「急いで東熊本病院に戻ろう！」指揮隊、救助隊、ポンプ隊、救急隊、活動している仲間たちが、患者たちが危ない。早く戻らなければ。そう強く思うが、市民にそれは関係ない。救急車の行く手を阻む市民が相次ぐ。「119 が繋がらない。」「ガスのような異臭がする。」「怪我をしたから病院まで連れて行ってくれ。」「２階から落ちてきた家具に当たった人がいる。」異臭の元であるプロパンガスの元栓を締め、怪我人の応急手当を実施し、自力での病院受診をお願いした。心苦しかったが仕方なかった。命に直結するものではなかったから。東熊本病院では仲間たちが、患者たちが命の危機に瀕しているかもしれないのだ。やっとのことで東熊本病院に戻った時には安堵した。東熊本病院は崩れておらず、隊員たちは大声を張り上げながら活動中であった。患者も全員救出され、道向かいの駐車スペースに集合していた。その数 20 余名。その全員を一手に収容してくれる医療機関が見つかり、今からそこに搬送するという。もちろん私たちも搬送にあたる。搬送中は患者を観察しつつも、家族の安否が気になってしょうがなかった。無事だろうか。連絡をとりたいがそんな暇はない。妻を信じるのみだ。

その後も救急要請は留まるところを知らず、帰れるようになったのは 16 日の昼頃だった。妻たちは、県北に住む弟のところに身を寄せ難を逃れていることを電話で知る。妻も同じく私の身を案じていたが、活動の支障になると思い、私からの連絡を待っていてくれたらしい。「大丈夫。ありがとう。今から帰るけど、そっちにはまだ行かれん（行けない）。また大きな地震がくるかもしれん（しれない）。気を付けとってくれ（気を付けるように）。」その言葉を絞り出すのが精一杯だった。ひどい交通渋滞の中、誰もいない家に帰り、泥のように眠った。まともに眠るのは約３日振りだった。

地震発生から数日が経過し、支援物資も順次、充足しだした頃、益城西原署に大きなダンボールが数個置かれていた。どういう経緯で、誰が持ってきたかは覚えていないが紛れもなく支援物資だった。食料品こそ入っていないものの、歯ブラシやタオル、ウェットティッシュ等の日用品から、衣服、紙オムツ、婦人用品、幼児向けのノートや筆記具なども入っていた。新品、中古、未開封、自前包装、様相はそれぞれだったが、どれも心がこもっていた。メッセージカードもたくさん入っており、活力源となったことを今でも鮮明に思い出す。特に私の琴線に触れたのは、東北や関西から、「自身が被災した時に支援物資を頂き、とても助かり、励まされた。だから今度は私が支援物資を送ります。」といった内容のもの。中古の品や自前包装の品があることから、とにかく急いで届けたいという気持ちがひしひしと伝わってきた。必要とする人の元へ届けたいという純粋な優しさは、市民を守る、と傲り高ぶっていた私の心に深く刺さった。東日本大震災のときは、緊急消防援助隊の一員として宮城県で活動した経験がある私であったが、受援の立場になるのは初めての経験であった。見ず知らずの人から送られてきた支援物資というものは、こんなにも被災者の心の支えになるものなのか。励まされるものなのか。メッセージカードの１枚１枚に目を通していると、目頭が熱くなった。

市民を守る、なんて当たり前の気持ちだ。消防士なのだから。そのために消防士になったのだから。その気持ちは忘れてはいけない。だが、市民１人ひとりにも、守りたい、助けたいという気持ちがある。確かにある。そのことを忘れず、傲ることなく、これからの消防人生を歩んでいかなければならない。そんな気持ちにさせてくれた熊本地震であった。

最後に、ご支援いただいた全国の皆様に、心からお礼を申し上げますとともに、熊本地震により被害を受けた全ての方に、心からお見舞い申し上げます。